

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

II.家族との支え合い

III.地域との支え合い

IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
ジャンプ 評価の公表で取り組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 3 年 8 月 5 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 13名	(依頼数) 18名
地域アンケート回答数	3名	

※事業所記入

事業所番号	3890300142
事業所名	グループホーム岩松
(ユニット名)	さくら
記入者(管理者)	
氏 名	梶原 喜久美
自己評価作成日	令和 3/ 7/ 1

【事業所理念】 ○ゆったり、楽しく、生き生きと。 ○家族や地域とのつながりを築き、暮らしやすい環境づくり。 ○本人の意思を尊重し、その人らしさを大切に生活。	【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 ・利用者の方が、安全で快適な生活を過ごし、他の利用者と仲良く過ごせる日々、家族の方との面会(現在コロナウイルス防止対策として面会禁止)など支援を行う。 ・入所時と現在の生活の中での変化などに早く気づき対応する。利用者がストレスを感じないように散歩に出かけ気分転換を図り、近所の方と会話をしたりしている。 ・食事の時間変更を行い、職員が一緒に食卓に着くようにし、課題についての目標を心掛ける。	【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 事業所の母体法人は医療機関であり、平成27年に併設の療養型病棟からグループホームに転換して事業を展開している。事業所は合併前の旧津島町の中心部にあり、総合病院や学校、郵便局、市役所の支所、駐在所など、多くの機関が近隣に点在している。また、事業所の建物の眼下の川沿いには、春になると満開の桜を見ることが出来る。事業所はもともと入院病棟であったこともあり、重度な利用者が多く、医療職の職員も多く残っており、心身機能の管理は細やかで、経験も豊富な職員が多い中で終末期を迎えられることは、利用者や家族の安心につながっている。さらに、法人では医療保険の療養の領域から、介護保険の共同生活へと変化した中で、目的や着眼点の違いを理解しつつ、事業所で利用者主体の生活支援力を高めている段階である。加えて、医師である代表者のほか、管理者や職員のチームワークは良く、今後も介護サービス事業所として、一丸となった成長を期待することができる。
---	---	---

評価結果表

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅰ.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	入所前、家族・本人の希望を聞き入所後意向の変化に気付けるよう務めている。	○		○	入所前に、職員は利用者や家族から、思いや意向などを聞いている。利用者がずっと入所した当時の状態から変わらないことはないため、変化を捉えて気になることは職員一人ひとりが持参するノートに書き留め、職員間で話し合うことができる。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	本人がどうしてもらいたいのか、動作にアイコンタクトをとり把握している。				
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	要望にそえるように訪問時にお話を伺っている。				
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	職員が共有するための記録をしている。				
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	本人の思いを優先し、声掛けにて理解できるようにしている。				
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	興味のある話をして話題作りを提供している。			○	以前は、家族や親族等の面会時に、職員は利用者の情報を聞くことができていたが、現在のコロナ禍において、事業所では面会制限を設けているため、聞き取ることはできていない。また、アセスメントシートの生活歴欄の情報の記載が少なく、利用者の過去の暮らし方などを把握することが、生活や意思決定の支援に大きく役立つと考えられるため、情報収集や職員の共有方法に工夫を加えるなど、職員間で検討することを期待したい。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	日常生活の中で出来ることを発見する。				
		c	本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。	○	本人の性格を理解し、場所や時間の変化を知る。				
		d	不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。(身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等)	○	ストレスになっていることはないか、細かく観察する。				
		e	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。	○	聞き取りを行い、情報を共有している。				
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	表情やしぐさから、声にできないことを知る。			○	意思の伝達が難しい利用者には、職員が顔色などから意向を推察している。利用者の情報を集めるだけでなく、必要性や優先順位を決めて職員間で検討するなど、利用者の視点に立ってサービス提供ができることを期待したい。
		b	本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。	○	楽しく過ごせるよう利用者ができることを見つけている。				
		c	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。	○	ミーティング、モニタリングを利用し、変化を知ることに取り組んでいる。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
4	チームでつくる本人が より良く暮らすための 介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	暮らしぶりや、趣味を反映する。				月1回、両ユニットの職員が集まってミーティングを実施している。議事録は、検討事項と検討結果欄に分かりやすく記載され、職員間で共有しやすくなっている。また、多くの職員の意見に加えて、利用者や家族の意向も出し合うことで、より良い介護計画が作成できることを期待したい。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	ミーティングで話し合い、本人が楽しく過ごせるように努める。	○		○	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	他の利用者と一緒に時を過ごせるようにしている。				
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	○	家族の方からの電話・介護相談員の訪問・地域の人との交流。				
5	介護計画に基づいた 日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	ケアプランを共有できるよう、いつでも見られる場所に置き、職員間で共有している。			○	介護計画は個別にファイリングして、事業所内の見える場所に置き、いつでも職員は確認することができる。経過記録は、介護計画に沿ったサービスの実施記録になっていないため、職員が計画の理解や把握をするともに、丁寧な記録を心がけることを期待したい。また、利用者一人ひとりの様子は交流ノートに記録されている。さらに、職員が個別にノートを持って勤務しており、気づきを書き溜めて共有している。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	モニタリングで意見やアイデアを反映している。			△	
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子(言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等)や支援した具体的内容を個別に記録している。	○	ケース入力し、他の職員にも理解できるようにしている。			○	
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	○	個別にノートを持ち、容態や変化を見逃さない。			○	
6	現状に即した 介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	○	期間を確認し、話し合いを行いケアプランを作成している。			◎	長期計画は6か月、短期3か月で、定期的に介護計画の見直しをしている。大きな状況の変化があった場合には、計画を見直す体制はできているものの、訪問調査時の記録からはそうしたケースや記録を確認することができなかった。また、ミーティング時の職員間で話し合いをするほか、利用者や家族からの意見を吸い上げながら、アセスメント表へ新たな情報を追記するなど、多くの意見を反映させた介護計画の内容の見直しができることを期待したい。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	○	ミーティング利用し、確認を行っている。			○	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	○	他職種と連携し、本人を交え話し合いの場を持ち作成している。			○	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	時間調整を行い、会議を行っている。			○	毎月、両ユニットの職員が参加してミーティングを実施し、議事録を作成している。会議に参加できなかった職員を含め、議事録の確認後には各自押印し、見落としがないよう工夫している。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	職員が気付いたことや考え方等の各々の意見を聞き、全員で話し合う。				
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	○	多くの職員が参加できるよう日程の調整を行い会議を行っている。				
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	○	話し合いを行った内容を記録し、目を通したらサインをする。			○	
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容と方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	○	伝達内容をノートに記載している。			○	伝達ノートを活用して、職員間で申し送りをしている。伝達ノートには押印等がなく、職員間での共有状況が分からないため、職員の確認漏れがないようノートを有効活用して、確実な情報共有ができることを期待したい。
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	○	職員個々にノートを持たせ、専用ノート等にて利用者の様子など記述している。	○			

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にしたい支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	○	一人一人の意向を大切にしたい支援を行っている。				事業所では、利用者の思いや意向を大切にしたい支援をしている。また、おやつや飲み物の提供時のほか、身だしなみなどの場面では、職員は利用者が自己決定できるよう支援している。さらに、重度の利用者を含めて、利用者が自己決定や社会参加ができるよう職員間で話し合うなど、利用者にとって楽しい時間がより増えるような取組を期待したい。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	見てもらったり、問いかけたり、選ぶ楽しみを持ってもらう。			○	
		c	利用者が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかる力に合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	○	利用者が思いや希望を表せるよう、声掛けをし自己決定を促している。				
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にしたい支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	職員間の決まりや都合を優先せず、一人一人のペースに合った支援を行い、食事はゆっくり自分のペースで摂取してもらう。				
		e	利用者の活き活きた言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	「お変わりないですか」等の言葉をかけ、一人一人の言動や表情にて思いを満足してもらえるように気を付けている。			○	
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	本人の表情や発言に耳を傾けるよう注意し、苦痛を取り除く。				
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重したい関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にしたい言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	○	利用者の性格を把握し、言葉遣いや態度等気を付けている。また、大声で話さないよう気を付けている。	○	△	○	事業所では、言葉にも暴力があることなどを学ぶ機会があり、職員間で共有して、利用者に失礼のない態度や声かけができるよう取り組んでいる。耳の遠い利用者にも配慮し、職員が近くで声かけをするなど、さりげないかわりにも努めている。また、居室への入室時には、職員からノックと声かけをして、入室するようにしている。さらに、全ての居室にはのれんを掛けられ、入り口は解放されているものの、職員は利用者から希望があれば、閉める対応もしている。
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉がけや対応を行っている。	○	強制的な誘導はしないように、声を掛けて同意を得て対応している。			○	
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	気遣いの出来る介助を行っている。				
		d	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	入室の際はノックをし声かけを行ってから入室する。退室時は声をかけてから退室する。			○	
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	○	重要項目に目を通し、理解している。				
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けってもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	○	お手伝いしてもらったら「ありがとう」の言葉を忘れない。				事業所には重度の利用者が多く、日中にリビングで過ごす利用者は限定されている。今後は、その都度職員から声かけをするなど、重度の利用者も食事やおやつ、その他の時間にも可能な限り居室から出て、リビングで他の利用者等と関われる機会を増やせるような取組を期待したい。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	お互い声掛けしながら、生活することで安心を得ている。				
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	○	利用者同士が仲良く生活できるように見守る。			△	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	利用者同士のトラブルはないが、気の合わない方もおられるので、キッチンで過ごされる際は、座席等の配慮をしている。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係 継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	○	入所時の聞き取りや本人との会話の中でこれまでの人間関係継続の支援を行う。				
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	○	訪ねてこられた近所の方の会話の中で、地域との関係生活状況などを知る。				
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	○	本人・家族が外出等希望されたときは、体調に応じ家族の協力にて外出する。				
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	馴染みの方が来られた時は、居室かキッチンにてゆっくり過ごしてもらう。(現在はコロナウイルス防止対策として面会禁止)				
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	△	天気の良い日や体調の良い日に車いすや歩行などにて近所に散歩に出かけ気分転換を行う。	×	×	△	現在のコロナ禍において、事業所では家族等との面会制限を設けて禁止しているほか、外出も制限されている。天気の良い日には、可能であれば近隣に散歩に出かけることもあるが、重度の利用者も多く、一度にたくさんの利用者を連れていけない現状もある。また、重度の利用者にはベランダやリビングに出て日光浴をしてもらうなど、気分転換も図っている。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	○	地域での催しなど自治会の方に声をかけていただき、参加させてもらっている。				
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	△	ストレッチャーにてキッチンで他の入所者の方と過ごしたり、短時間でも戸外で過ごせるように外出支援に取り組んでいる。			○	
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	○	希望する場所への外出は、家族の方の協力を得て出かけられるよう支援している。				
14	心身機能の維持、 向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	どのような場面で状態変化が起こるのか、職員が気付いたことの意見交換を行い、その状態を取り除けるよう取り組んでいる。				食事の時など、利用者自身ができることは、自分でしてもらい、職員は見守りやできないことの介助をしている。利用者が拒否する場合もあり、職員は根気強く声をかけるなど、可能な限り自身でしてもらうよう努めている。また、事業所には看護師等の資格を持つ職員が多く在籍しており、医学的な観点から利用者の心身機能や能力を正確に把握することができている。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	機能低下の特徴の理解し、残存機能を活用したレク等で維持向上が図れるように努めている。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	○	自分自身で出来た時の達成感が得られる場面を見守っている。	○		○	
15	役割、楽しみごと、 気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	利用者の個々の生活の中で有する力で楽しめるよう支援している。				洗濯物たたみや新聞を折ってごみ箱づくりをしてもらうなど、利用者にできる範囲の役割を担ってもらっている。重度の利用者が多く、役割や出番づくりは難しくなってきたものの、一人でも多くの利用者が楽しみや役割を持てるよう、職員間で継続して検討することを期待したい。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	認知が進んでも、出来ることを一緒に行ったりして喜びのある日常を過ごせるよう支援する。	○	○	○	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	○	地域の行事に参加するように努めている。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみや おしやれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つととらえ、その人らしい身だしなみやおしやれについて把握している。	○	本人の希望の衣服選びや、身だしなみ・おしやれ等本人の個性を大切にする。				整容の汚れや乱れが見られる利用者には、職員がさりげなく声をかけて、フォローをしている。管理者等は、「重度の利用者について、意思決定の部分で課題がある」と感じている。今後は、アセスメントの生活歴や馴染みなどを確認したり、家族から情報を聞いたりするなど、利用者本人の希望を踏まえた活動的な生活が送れるよう支援できることを期待したい。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みに整えられるように支援している。	○	落ち着いた生活が送れるよう愛着のあるものを持ってきてもらう。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員と一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	本人の意思を大切にし、良い結果が得られるよう支援している。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせたその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	○	季節の移ろいを感じとれるよう年中行事の取入れや衣替えを行っている。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にせずさりげなくカバーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	本人を傷つけないように、さりげない対応にてサポートをしている。	○	○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	○	行きつけの店の希望があれば家族の方に連絡し、連れて行ってもらう。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	△	意思疎通が困難であっても表情やしぐさで判断する。その人らしさが保てる支援を行っている。			△	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	その方に合った食事形態により、味覚・視覚を大切にしゆっくり食べてもらう。				以前療養型病棟で使用していた給食室で、専属の職員が調理している。利用者が台拭きや後片づけなど、できることを手伝っているものの、調理などには関わっていないため、調理を担当する職員がフロアに出て、利用者と一緒に下ごしらえをするなど、少しでも利用者が調理に関われる工夫を期待したい。また、利用者から献立のリクエストがあれば、メニューに反映することができている。食器は主に事業所の物を使用しているが、希望があれば自宅等から持ち込んで使用することもできる。事業所には、重度の利用者が多く、利用者の食事介助が終わった後で、別途職員が昼食を摂っている。重度な状態であっても、食事の時間には食堂で他の利用者や職員と関わりが持つことも重要であるため、毎回「食堂と居室のどちらで食事を食べたいか」利用者に確認しながら、食事支援できることを期待したい。さらに、献立のバランスなどの栄養面に関しては、法人の代表者が医師であるため、十分相談しながら対応している。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	○	食事は厨房で準備するため、後片付けができる方は手伝ってもらう。			△	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	行事にておやつ作りをする時は、飾りつけや片付けなどできることを手伝ってもらい達成感につなげている。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	入所時、本人・家族に好き嫌い、アレルギー等聞取りを行い把握している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔ながらの味などを取り入れている。	○	献立の中に季節の食材を取り入れたり、高齢者の方が多いので、昔懐かしい物を出してもらったりしている。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせた調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いりどりや器の工夫等)	○	咀嚼・嚥下困難など変化があるときは、食事形態を変更して経口盛り付けにも工夫してもらう。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	自宅から使い慣れたものを持って来られる方もいる。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	○	利用者と一緒に食事を食べることはないが、一人一人の様子を見守り、その方のペースに合った食事摂取、食べ残し等があってもさりげなくサポートしている。			△	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	食事のメニューを伝え、「美味しそうな匂いがするね」「もうすぐ食事の時間ですよ」と声をかける。	○		△	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べれる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	利用者一人一人の毎日の食事摂取量・水分摂取量を記録し、一日に必要な水分・食事がとれているか確認する。				
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	○	少しでも摂取できるように、食事形態を変更したり水分補給などにて低栄養になったり脱水症状を起こさないよう取り組んでいるが、食事が摂取できないときはあべ医師に報告し指示を仰ぐ。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	体調変化がある場合は、職員同士で話し合いを行い調理方法を変更する。			○	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	手洗い・消毒を徹底し、食材は新鮮なうちに使いきる。調理器具は熱湯をかけ熱殺菌する。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	○	1日3回口腔ケアを行う。				食後には、利用者は口腔ケアをしている。利用者自身で歯磨きなどできることはしてもらい、できないことは職員が介助や確認をしている。また、定期的に歯科医に往診してもらったり、家族に歯科医への受診支援を依頼したりするなど、事業所では利用者の口腔内の状態を把握している。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	口腔ケア時、口腔内異常の早期発見・義歯の不具合があれば本人・家族の希望を確認し歯科受診を行う。			○	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	○	歯科医から口腔ケアについて指導を受けており、正しい方法を学び支援に生かしている。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	清潔保持が出来るように努めている。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。 (歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等)	○	食後のうがい・歯磨き・入れ歯の手入れ等でできないことは手伝いながら口腔清潔の支援を行っている。			○	
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医に受診するなどの対応を行っている。	○	家族・本人と相談し、受診を決めている。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	声掛けにてトイレ誘導を行い、排泄自立を促し、気持ちよく過ごせるよう努めている。				職員は、利用者に声かけや誘導を行い、可能な限りトイレで排泄できるよう支援している。事業所では、利用者の排泄状況や水分量などを把握し、丁寧に記録を残すことができている。さらなるステージとして、利用者一人ひとりのトイレ介助の有無や、おむつやリハビリパンツなどの排泄用品の形態の変更について、職員同士が口頭での共有のみに留まらず、話し合った内容を記録に残しておくことを期待したい。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	便秘によって腹部が張り食事が少なくなってきたりするので、体調管理をしっかりとする。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	○	排泄チェック表を使用し、排泄状況を把握している。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	○	個々のパターンを理解し、その時々状態にて転倒の危険がなければ、トイレでの排泄を促す。	○		○	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	高齢となり、自分の足で立つことが困難な場合やトイレが間に合わなかった時などは、状況に応じておむつ・リハビリパンツを利用する。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	声掛けにて、早めのトイレ誘導を行っている。				
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	日中はリハビリパンツ着用にて、トイレに行かれるが、本人希望にて夜間のみおむつをされる方もおられる。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けている。	○	下着着用の方もおられるが、状況に応じてリハビリパンツを使用したりしている。				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	△	ベッドからの離床を促し体を動かすように支援し、繊維質の多い食事や水分摂取にて自然排便を促しているが、どうしても排便困難な時は薬を使用する。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)。	○	週2回入浴としているが、体調が悪かったり入浴を拒否される方は体調の良い日に変更したり、時間変更にて入浴してもらっている。	◎		○	週2回を基本として、利用者は入浴することができる。入浴時間は事業所で設定しているものの、好みのシャンプーを使用したり、入浴の意思の確認や声かけを工夫したりするなどの対応もしている。また、重度の利用者にはシャワーチェアを使用してシャワー浴などの対応をするほか、2人体制での入浴介助もしている。今後は、利用者の希望やこれまでの習慣に応じて、柔軟に対応できるよう職員間で話し合うなど、利用者が入浴を楽しめるような工夫を期待したい。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分に入浴できるよう支援している。	○	石鹸やシャンプーは利用者の好みのものを使用し、希望やタイミングに合わせて入浴してもらっている。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	浴室は個室で介護職員が2人付き、利用者が安全安心に入浴できるよう支援している。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせずに気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	入浴を強制しないで、「入浴しませんか」「気分悪いですか」などの声掛けを行い、気持ちよく入浴ができるよう支援している。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	○	入浴前にバイタルチェックを行い、特に異常がなければ入浴してもらう。入浴後のバイタルチェックも行っている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	利用者一人一人の生活パターンがあるので、その時々状況に応じて安心して気持ちよく眠れるよう支援している。				事業所では、安易な内服薬に頼ると日中まで眠気が残ってしまう利用者もあり、できる限り服薬に頼らない支援に取り組んでいる。日中の活動を増やすなど、職員は利用者が夜間自然な安眠できるよう努めている。また、日中も居室で過ごしている重度の利用者がいるものの、職員は丁寧な声かけをしている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	部屋の明るさ・寝具・寝衣の調節を行い、気分・体調に合わせて入眠できるように配慮している。				
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	昼夜逆転があるので、日中は職員が話しかけたり、ベッドから離床を勧めたりして体を動かし、夜は自然入眠できるよう支援している。			○	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	○	利用者が居室にてゆっくり過ごす時間を大切にしている。				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	○	本人自身が直接電話(携帯)をされたり、希望に応じ連絡を取ったり、外部との交流を支援している。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	利用者より代筆を希望されたときはお手伝いしている。				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	居室で気兼ねなく話ができるよう配慮している。				
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	手紙・葉書等読める方には本人に渡しているが、家族に郵便が届いていること連絡し、対応は家族にお願いしている。				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	利用者の希望があれば家族への電話をしたり、電話がかかった際は、本人と話をしてもらっている。				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	本人がお金を所持することで安心されることを職員は理解している。				
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	○	訪問販売の方に寄ってもらい買い物をする楽しみを持ってもらう。				
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	○	スーパーなどへの買い物に出かけることは無理であるが、訪問販売を利用している。(火曜日・木曜日 あすも)				
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	○	大金ではないが、お小遣い程度のお金を持つことでの安心感を得てもらう。				
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	入所時お金の所持方法など、本人・家族と話し合っている。				
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	家族より預かったお金は、預かり金として管理し、必要時使用させてもらい、預かり金額・使用した金額など出納帳に記載している。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	本人や家族のその時々の変化・状態に対して支援やサービスを行えるように取り組んでいる。	○		○	利用者等の希望に応じて、家族や介護タクシーに協力してもらいながら、馴染みの理容院に出かけたり、訪問マッサージなどの外部サービスを利用することができていた。現在のコロナ禍において、外出や面会の制限が設けられており、利用者の要望には対応できないこともある。

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(3)生活環境づくり									
25	気軽に入れる 玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	玄関にウェルカムボードを設置し、催し等の記載を行い家族の方や近所の方が気軽に訪問できるように工夫している。 (現在コロナウイルス防止対策として入所禁止)	◎	◎	○	事業所の玄関は、母体医療機関の裏側にあるものの、医院と1階ユニットはつながっている。玄関の正面には、大きな手書きのウェルカムボードを設置され、分かりやすく気軽に入りやすい環境となっている。
26	居心地の良い 共用空間づくり	a	共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、家庭的な雰囲気有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。（天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものしか置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそごような設えになっていないか等。）	○	季節の変化が感じられる花を飾ったり、入所の方と飾り物を作って貼ったりして、住まいとしての心地よさを感じてもらおう。	○	×	○	事業所は、以前療養型病棟として使用していた建物を改修して使用している。共有空間や居室には、病室の名残はあるものの、利用者や職員の作った物を壁などに飾り、居心地の良い共用空間となっている。また、事業所の建物の眼下の川沿いには、春になると満開の桜を見ることができる。さらに、訪問調査日には、季節の花の飾りを用意したり、1Fから2Fに利用者が遊びに来て、リビングで交流したりする姿を見ることができた。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	○	大きな音を出さないよう配慮し、明るさを調整したり掃除もこまめに行っている。				
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激（生活感や季節感を感じるもの）を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	花を飾ったり、カレンダーなど季節の移り変わりを知ってもらい、心地よく過ごせるよう心掛けている。				
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	居室に閉じこもらないようキッチンでお話をしてもらったり、静かに過ごしたい気分時はその居場所を工夫している。				
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないう工夫している。	○	浴室は個室であり、戸を開けて一人一人入浴をもらっている。介助用トイレは直接見えないようにしている。				
27	居心地良く過ごせる 居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	居室は自宅からお気に入りの物や仏壇などを持って来られ過ごしやすいように工夫している。	○		○	居室には、ベッドやタンスが備え付けられている。仏壇や棚などは、利用者が使い慣れた物や馴染みの物を持ち込むことができ、利用者に応じた部屋となっている。また、以前の病室を居室として使用しており、徐々に家庭的な空間になってきている。
28	一人ひとりの力が 活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	バリアフリーであり、安全のため手摺設置、浴室・トイレ・各居室にもフザーがあり、いつでも対応できるよう配慮している。			○	事業所内には、トイレや非常口の方向を分かりやすいように表示し、利用者自身の力で移動する際の目印となっている。
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	○	居室の前には目印となるものを飾ったり、物品移動する場合は利用者への説明を行う。				
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。（ぼうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等）	○	利用者が集まるキッチンには、新聞・ぬりえ・クレヨン・色鉛筆・折紙など自由に使用できるよう置いており、自由に過ごされている。				
29	鍵をかけない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット（棟）の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。（鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等）	○	居室やユニットの出入り口に鍵をかけない生活にて、徘徊の恐れのある方への見守りを職員全員で行っている。	○	○	○	日中は、事業所の2階玄関と診療所側の玄関の鍵は空いているものの、現在のコロナ禍で面会や外出の制限を設けていることもあり、1階玄関は施錠をしている。また、職員は鍵をかけることの弊害を理解していることもあり、コロナ禍の終息後等には玄関を解放するなど、職員間で検討することを期待したい。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	○	利用者の安全を確保しつつ、抑圧感のない自由な暮らしを支援し、心豊かな暮らしができるよう支援している。				
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している（外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等）。	○	施錠も拘束であることを理解し、徘徊のある方が出入口付近におられる時は職員が声をかけるようにしている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	入所時のアセスメントを職員間で共有し、個々の病歴・現病・留意事項について把握している。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	毎日のバイタルチェックにて異常の早期発見に努めている。異常がある時は状態をノートに記載し職員間で共有し一般状態の病状変化など把握している。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	○	利用者の体調異常など気になるときは、協力医あべ先生に報告・診察をしてもらっている。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	○	受診は本人及び家族の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医の受診ができるよう支援している。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	○	主治医の継続的な医療を受け、異常の早期発見が出来るよう支援している。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	○	通院方法・受信結果・報告に関する情報など、共有できるノートに記録し、次回の診察がスムーズに行えるように介護タクシーの予約など本人・家族と話し合いを行っている。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	○	家族などと相談しながら、安心して治療できるように医療機関に対して本人の情報提供を行っている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	○	情報の提供交換を行い、早期退院に繋げる。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	○	家族などと相談しながら、医療機関に対して本人に関する情報の提供などを行い、スムーズに入院できるよう支援している。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	○	介護職員は、利用者の異常に気付いたときは、看護師に相談して早めに対応が出来るように心掛けている。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	○	医師が事業所の3Fに居住しているので、24時間体制で緊急時にも対応できる。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	○	異常があれば看護師に報告し対応できるようにしている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	○	職員全てが用法・用量は理解しており、間違いないように服薬支援を行っている。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	○	薬の変更があれば、送りノートに記載し薬の間違いはないか数回チェックを行い、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	服薬介助を行い薬による体調変化はないか、スムーズに飲めるかなど常に服薬介助を行っている。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	内服後、状態の変化など見られたら早めに医師・看護職員に状況報告を行い記録を残す。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	○	状態変化の段階ごとに、本人・家族との話し合いを行い、要望意向や方針など共有するようにしている。				事業所では、現在看取り加算の算定はしていないため、看取り指針は作成していない。以前の療養型病床で勤務していた職員が事業所には多く在籍しており、事業所には母体医療機関も併設され、24時間体制で専門的医療の提供が受けられる仕組みが整っている。また、緊急時には連携も迅速に取れ、利用者や家族、職員には安心感がある。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけでなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	○	医師・職員・本人・家族と早い段階から話し合いを行い、方針を共有する。	○		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々の職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	職員の思いや力量を理解し、どこまでの支援ができるか支援方法を考えるようにしている。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	主治医・職員・本人・家族に事業所でできることとできないことの対応方針についての十分な説明を行い、主治医と連携を取りながら対応できるようにしている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	○	24時間体制で医師・看護職員が介護職員と共に支援しており、利用者・家族が安心して過ごせるよう支援している。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	○	本人や家族の気持ちに寄り添いながら支援対応している。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	感染対策マニュアルにて、予防策・対応策など職員で勉強会を行っている。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	感染症マニュアルにて、感染が発生した場合の手順に沿った対応ができるように、日頃より職員全員が手順に沿った対応方針を共有している。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	○	保健所・行政・医療機関などを通じて感染症に対する予防対策、地域の感染発生状況の情報を入手し予防対策を取り入れている。				
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	○	感染症流行時期は早めの対応対策を行い発生状況の収集を行う。				
		e	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	○	来訪者の方にも感染症対策としての手指消毒、清潔の保持などの説明を行い協力してもらう。職員全員手洗いうがい・マスクの着用など徹底して行っている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅱ.家族との支え合い									
37	本人とともに支え合う 家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	共に生活をしていると思ってもらえるように一緒に本人を支えていけるように職員が一人一人支えていけるように支援している。				現在のコロナ禍において、事業所では面会や外出の制限が設けられているため、家族との食事会を兼ねた親睦会や行事参加、面会は自粛している。連絡事項があれば、必要に応じて家族に電話したり、家族が母体医院の受診時に利用者の様子を伝えたりしている。また、面会等が自粛されているため、利用者の様子を撮った写真などを家族に送付して、利用者の近況を伝えている。また、利用者家族等のアンケート結果から、事業所の運営上の事柄などが伝わっていないことが窺えるため、請求書の送付時に事務連絡を沿えて送付たり、SNSを活用して連絡したりするなど、多くの家族から理解が得られるとともに、家族の意見を取り入れながら事業所が生活の場としての雰囲気づくりができることを期待したい。
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	面会の方が来られた時などは、ゆっくり会話ができるように支援している。				
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等)	○	行事に参加してもらったり、戸外外出など家族の方に協力をお願いしている。	×		○	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	誕生会での写真を部屋に貼ったり、日常生活の状況などを伝えたり電話で話せる方は連絡を取り話をしてもらっている。	○		○	
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的な内容を把握して報告を行っている。	○	個別ノートを作成し、日頃の生活状況を記録し見てもらい、家族からの要望や気付いたことなどを書いてもらい家族との関係づくりを支援している。				
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	生活の変化や会話の中での変化など、家族に理解してもらえるように状況を話してよい信頼関係が保てるように、日中穏やかに生活できるように支援している。				
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	○	推進会議で事業所の出来事などを報告し、協力を得るようにしている。	×		△	
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。(家族会、行事、旅行等への働きかけ)	○	年間行事の参加や、年1回家族との親睦会を開催して交流が持てるようにしている。				
		i	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	高齢であり、認知症もあるため何があるかわからない状況であるが、穏やかな暮らしが継続できるよう支援している。				
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	○	入所時具体的に説明を行い、理解・納得を得ている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	退居については、契約時説明を行っており、希望先へのスムーズな移動ができるよう支援している。				
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。(食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	○	重要事項説明書に示し、入所時説明会を行い同意を得てサイン・押印をいただき家族に1部渡している。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅲ. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	事業所での会議に自治会代表の方に参加していただき、事業所の役割や目的を説明して理解してもらっている。	/	◎	/	現在のコロナ禍において、事業所では面会や外出の制限を設けているため、以前のような地域とのつながりや交流は見合わせている。コロナ禍以前には、保育園のハロウィンに参加したり、秋祭りの神輿に來訪してもらったり、地域行事に参加するなど、地域との交流やかかわりを持つ機会はあったが、現在は減少している。また、地域関係のお知らせなどは、回覧板で確認している。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。（日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等）	○	自治会の集会に参加させてもらったり、行事などに参加させてもらったり、近所の散歩時には話をしたりして地域との繋がりを持つようにしている。	/	△	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	○	散歩時声をかけていただいたり、できることがあれば協力していただける言葉をいただいたりしている。	/	/	/	
		d	地域の人気が気軽に立ち寄ったり遊びに来たりしている。	○	「近くきたから顔を見に来たよ」と言って寄っていただいたりしている。	/	/	/	
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	○	入所の方に声をかけていただいたり、日常的な付き合いができています。	/	/	/	
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。（日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援）	○	近所の住民の方が行事などがある時声をかけてくださり、一緒に参加させてもらい生活の広がりや支援を行っている。	/	/	/	
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	○	防災訓練など本人が心身の力を発揮しながら、安全な暮らしができるよう支援している。	/	/	/	
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている（公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等）。	○	消防訓練に立ち会っていただいたり、理美容店の方に散髪に来ていただいたりしている。移動販売にも来ていただいて利用者が自分で好きなものを買ったりできるようにしている。	/	/	/	
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	○	運営推進会議には、自治会の方や家族の方にも声をかけ参加してもらっている。	×	/	△	運営推進会議には、町内会長や民生委員、施設職員、警備会社、家族、市担当者等の参加を得て開催している。毎回家族の参加を呼びかけているものの、家族の参加は少なくなっている。会議では利用者の状況や日頃の事業所の取組みなどを報告している。会議の中で出された意見を職員間で検討したり、要望などの対応結果などを次回の会議で報告したり、議事録に出された要望を記録に残すなど、参加者に理解を得ながら工夫された会議となることを期待したい。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実績、評価への取り組み状況（自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等）について報告している。	○	評価への取り組み状況、サービスの実績など参加者に報告している。	/	/	○	
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	○	会議での意見や提案を日々サービス向上に活かし、後日状況の報告を行っている。	/	×	○	
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	○	参加メンバーの変化はあまりないが、できるだけ多くの方の出席があるように、時間帯などの配慮を行っている。	/	○	/	
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	○	議事録各ユニットに提示している。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	事業所の理念について共通認識を持ち、尊厳ある自立した日常生活ができるよう、また理念に基づいたものとなるように職員全員が認識し実践している。				
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	入所時、事業所の理念を本人・家族の方に伝え、玄関に表示している。	×	×		
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	事業所内での研修を行ったり、外部での研修にもできる限り参加している。				代表者や管理者に対して、職員は何でも言い合える関係性を構築することができている。定期的に内部研修を実施して、職員のスキルアップにも努めていたが、現在のコロナ禍において、開催を中止している。また、法人・事業所として、職員の意見を取り入れながら、働きやすい職場環境づくりに努めている。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	△	事業所内での勉強会・研修を行っている。				
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	職員の意見や要望等があった場合は管理者が取りまとめ、代表者に伝えるようにしており、働きやすい職場環境になるように努めている。				
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	研修参加等の活動を通して、職員の意識を向上させていく取り組みをしている。				
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	体調不良やストレスが見受けられるときは、さりげなく話をしたりゆっくり休養ができるよう取り組んでいる。	○	○	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	○	虐待防止マニュアルを共有し、虐待につながる行為について理解し入所の方への不適切な言葉遣いや態度をとらないように気を付けている。				事業所では虐待防止マニュアルを作成しているほか、月1回実施するミーティング等を活用して、言葉づかいの注意喚起や気づいたことなど、職員間で話し合いをしている。不適切なケアが見られた場合にも、職員間で正しいケアや改善策などの話し合いをしている。また、一方で、虐待は職員によるものだけでなく、面会時等の様々な場面で虐待につながる行為も考えられるため、定期的に虐待防止法の勉強会を実施するなど、日頃のケアを見直す機会を設けることを期待したい。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	月一回開催のミーティングで、気づいたことや改善策など話し合い、日々のケアにつなげている。必要に応じて、その時々で話し合うこともある。				
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見過ごされることがないよう注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	○	全職員は虐待は不適切な行為を発見したり、他の職員から聞いた時は速やかに話し合い、正しいケアが行われるように取り組んでいる。			△	
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	態度・言動・言葉のトーンで利用者へのケアや他の職員に対して不快な思いをさせていないか日常的に注意を払っている。				
44	身体拘束をしない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	○	身体拘束をしないケアとは何かを身体拘束マニュアルにて理解し、やむを得ない場合の身体拘束を行う際は家族・本人に理由を話し拘束時間などの説明を行い、承諾書にサイン・押印を頂くようにしている。				
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	○	ミーティングやその時々で具体的な禁止行為の理解について話し合い、職員全員で共有し取り組んでいる。				
		c	家族等から拘束や施設への要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	△	利用者の安全確保、自由な暮らしの支援を行うため、施設・拘束はできる限りしないようにしているが、状況によってやむを得ない場合の拘束が必要な際は、家族に説明をし理解を得たうえで用紙にサイン・押印を頂いている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する 制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解している。	△	制度の違いや利点などについて理解に務めている。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	△	相談があれば支援を行う。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	△	支援が必要な利用者が、制度を利用できるように地域包括支援センター等の連携体制を築いている。				
46	急変や事故発生時の 備え・事故防止の 取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	○	事故発生時や急変に備えての対応マニュアルにて周知している。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	医師の支持のもと対応している。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	ヒヤリハットにまとめ、事故の発生する時間帯や事故の種類など担当者がグラフ化し職員間で事故防止の取り組みを行っている。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	危険物の排除、誤飲防止として手の届く場所に物を置かない、滑らない履物を履く等事故防止に努めている。				
47	苦情への迅速な対応と 改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	苦情マニュアル作成あり。苦情箱を各ユニットへ設置し、苦情等あった場合は速やかに対応できるように職員間で話し合っている。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	現在までに利用者や家族・地域からの苦情はない。必要な場合は、市町にも相談・報告を行います。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	苦情が発生した場合は、要員・原因を見つけ速やかに回答するように心がけている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等)	○	声掛けを行い、会話の中で思っていることや、してほしいことなど気付けるようにしている。			○	職員は利用者から、日常生活の中やサービスの実施時に意見を聞いている。家族には、面会時や電話連絡時を活用して、職員は意見や要望を聞くよう努めている。また、管理者は職員との関係性が良好で、積極的に職員から運営に関する意見が出される環境もできている。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	家族の意見・要望などの相談窓口(意見箱)の措置。面会に来られた時、個別に話を聞いたり個別ノートに意見や希望等書いてもらっている。	○		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	事業所内各ユニットに、意見・要望箱を設置していることは伝えているが、【市町村の窓口】【公的団体の窓口】などあることを重要事項説明書にも記載している。				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	職員の意見・要望等管理者が取りまとめ、代表者に持っていく相談している。				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	ミーティングにて意見・提案を発表してもらい、より良い支援ができるよう検討している。			○	

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	△	年1回自己評価を行っている。				外部評価の評価結果や目標達成計画は、運営推進会議の中で報告し、参加者から意見をもらっている。今後は、運営推進会議の議事録を詳しく記録して、欠席者にも周知することで次回の会議の議題に取り入れたり、参加メンバーに取組み状況のモニターをしてもらったりするなど、事業所として少しずつステップアップしていくことを意識しながら、周知などの取組みを強化することを期待したい。
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	△	サービス評価を通しての課題について話し合いを行い、目標達成を心掛けている。				
		c	評価（自己・外部・家族・地域）の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	事業所が利用者に対し目標達成計画を作成し、達成に向けて可能な限り対応を行う取り組みを行っている。				
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	○	運営推進会議にて報告。今後の取り組み方についてメンバーの方々にアドバイスをいただき話し合っている。	×	×	△	
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	○	事業所内運営推進会議にて、目標達成計画の取り組みの成果を報告している。				
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。（火災、地震、津波、風水害、原子力災害等）	○	災害発生対応マニュアル作成あり。全職員が災害発生時にどのような対応をすればよいかを確認し把握している。				事業所は医療機関と合同で、年2回避難訓練を実施している。現在のコロナ禍において、地域住民や消防団との合同訓練への呼びかけは自粛している。また、事業所を含む建物は河川の近くにあるため、水害など様々な災害を想定した訓練を実施し、より多くの協力体制が築けることを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	地域・自治会の皆さんと一緒に避難訓練を行う。				
		d	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	保管物品の点検は担当者が定期的に行っている。				
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	○	地域住民、近隣の消防団の方と話し合う機会をつくり、災害時の対応など支援体制を確保している。	×	×	○	
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。（県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等）	○	災害に対する訓練参加。消防訓練を行なっている。				
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。（広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等）	△	自治会の集会に参加させてもらい、事業所での活動の報告をし、協力等お願いしている。				事業所の母体が医療機関であるため、事業所として相談体制を整えているものの、どうしても病院への相談が多くなっている。今後は、市行政や地域包括支援センターのイベントや研修に参加協力したり、地域にある他のグループホーム等の関係機関とも連携を密にしたりするなど、地域ケアの拠点として機能していくことを期待したい。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	相談があれば対応していきたい。		×	△	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。（サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等）	○	事業所内でのイベントなどに参加していただき、地域の方との交流を行っている。				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	○	体験学習希望の受け入れを行っている。				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。（地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等）	△	地域イベントやボランティア活動等できることへの参加をしたり、地域連携室などの機関との連絡を行っている。			○	

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

Ⅰ.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

Ⅱ.家族との支え合い

Ⅲ.地域との支え合い

Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
 ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
 ジャンプ 評価の公表で取り組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 3 年 8 月 5 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 13名	(依頼数) 18名
地域アンケート回答数	3名	

※事業所記入

事業所番号	3890300142
事業所名	グループホーム岩松
(ユニット名)	すみれ
記入者(管理者)	
氏 名	梶原 喜久美
自己評価作成日	令和 3年 7月 1日

【事業所理念】 ○ゆったり、楽しく、生き生きと。 ○家族や地域とのつながりを築き、暮らしやすい環境づくり。 ○本人の意思を尊重し、その人らしさを大切に生活。	【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 ・利用者の方が、安全で快適な生活を過ごし、他の利用者と仲良く過ごせる日々、家族の方との面会(現在コロナウイルス防止対策として面会禁止)など支援を行う。 ・入所時と現在の生活の中での変化などに早く気づき対応する。利用者がストレスを感じないように散歩に出かけ気分転換を図り、近所の方と会話をしたりしている。 ・食事の時間変更を行い、職員が一緒に食卓に着くようにし、課題についての目標を心掛ける。	【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 事業所の母体法人は医療機関であり、平成27年に併設の療養型病棟からグループホームに転換して事業を展開している。事業所は合併前の旧津島町の中心部にあり、総合病院や学校、郵便局、市役所の支所、駐在所など、多くの機関が近隣に点在している。また、事業所の建物の眼下の川沿いには、春になると満開の桜を見ることが出来る。事業所はもともと入院病棟であったこともあり、重度な利用者が多く、医療職の職員も多く残っており、心身機能の管理は細やかで、経験も豊富な職員が多い中で終末期を迎えられることは、利用者や家族の安心につながっている。さらに、法人では医療保険の療養の領域から、介護保険の共同生活へと変化した中で、目的や着眼点の違いを理解しつつ、事業所で利用者主体の生活支援力を高めている段階である。加えて、医師である代表者のほか、管理者や職員のチームワークは良く、今後も介護サービス事業所として、一丸となった成長を期待することができる。
---	---	---

評価結果表

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅰ.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	入所前、家族・本人の希望を聞き入所後意向の変化に気付けるよう務めている。	○		○	入所前に、職員は利用者や家族から、思いや意向などを聞いている。利用者がずっと入所した当時の状態から変わらないことはないため、変化を捉えて気になることは職員一人ひとりが持参するノートに書き留め、職員間で話し合うことができる。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	本人がどうしてもらいたいか、動作にアイコンタクトをとり把握している。				
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	要望にそえるように訪問時にお話を伺っている。				
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	職員が共有するための記録をしている。				
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	本人の思いを優先し、声掛けにて理解できるようにしている。				
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	興味のある話をして話題作りを提供している。			○	以前は、家族や親族等の面会時に、職員は利用者の情報を聞くことができていたが、現在のコロナ禍において、事業所では面会制限を設けているため、聞き取ることはできていない。また、アセスメントシートの生活歴欄の情報の記載が少なく、利用者の過去の暮らし方などを把握することが、生活や意思決定の支援に大きく役立つと考えられるため、情報収集や職員の共有方法に工夫を加えるなど、職員間で検討することを期待したい。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	日常生活の中で出来ることを発見する。				
		c	本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。	○	本人の性格を理解し、場所や時間の変化を知る。				
		d	不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。(身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等)	○	ストレスになっていることはないか、細かく観察する。				
		e	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。	○	聞き取りを行い、情報を共有している。				
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	表情やしぐさから、声にできないことを知る。			○	意思の伝達が難しい利用者には、職員が顔色や顔色などから意向を推察している。利用者の情報を集めるだけでなく、必要性や優先順位を決めて職員間で検討するなど、利用者の視点に立ってサービス提供ができることを期待したい。
		b	本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。	○	楽しく過ごせるよう利用者ができることを見つけている。				
		c	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。	○	ミーティング、モニタリングを利用し、変化を知ることに取り組んでいる。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
4	チームでつくる本人が より良く暮らすための 介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	暮らしぶりや、趣味を反映する。				月1回、両ユニットの職員が集まってミーティングを実施している。議事録は、検討事項と検討結果欄に分かりやすく記載され、職員間で共有しやすくなっている。また、多くの職員の意見に加えて、利用者や家族の意向も出し合うことで、より良い介護計画が作成できることを期待したい。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	ミーティングで話し合い、本人が楽しく過ごせるように努める。	○		○	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	他の利用者と一緒に時を過ごせるようにしている。				
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	○	家族の方からの電話・介護相談員の訪問・地域の人との交流。				
5	介護計画に基づいた 日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	ケアプランを共有できるよう、いつでも見られる場所に置き、職員間で共有している。			○	介護計画は個別にファイリングして、事業所内の見える場所に置き、いつでも職員は確認することができる。経過記録は、介護計画に沿ったサービスの実施記録になっていないため、職員が計画の理解や把握をするともに、丁寧な記録を心がけることを期待したい。また、利用者一人ひとりの様子は交流ノートに記録されている。さらに、職員が個別にノートを持って勤務しており、気づきを書き溜めて共有している。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	モニタリングで意見やアイデアを反映している。			△	
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子(言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等)や支援した具体的内容を個別に記録している。	○	ケース入力し、他の職員にも理解できるようにしている。			○	
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	○	個別にノートを持ち、容態や変化を見逃さない。			○	
6	現状に即した 介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	○	期間を確認し、話し合いを行いケアプランを作成している。			◎	長期計画は6か月、短期3か月で、定期的に介護計画の見直しをしている。大きな状況の変化があった場合には、計画を見直す体制はできているものの、訪問調査時の記録からはそうしたケースや記録を確認することができなかった。また、ミーティング時の職員間で話し合いをするほか、利用者や家族からの意見を吸い上げながら、アセスメント表へ新たな情報を追記するなど、多くの意見を反映させた介護計画の内容の見直しができることを期待したい。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	○	ミーティング利用し、確認を行っている。			○	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	○	他職種と連携し、本人を交え話し合いの場を持ち作成している。			○	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	時間調整を行い、会議を行っている。			○	毎月、両ユニットの職員が参加してミーティングを実施し、議事録を作成している。会議に参加できなかった職員を含め、議事録の確認後には各自押印し、見落としがないよう工夫している。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	職員が気付いたことや考え方等の各々の意見を聞き、全員で話し合う。				
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	○	多くの職員が参加できるよう日程の調整を行い会議を行っている。				
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	○	話し合いを行った内容を記録し、目を通したらサインをする。			○	
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容と方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	○	伝達内容をノートに記載している。			○	伝達ノートを活用して、職員間で申し送りをしている。伝達ノートには押印等がなく、職員間での共有状況が分からないため、職員の確認漏れがないようノートを有効活用して、確実な情報共有ができることを期待したい。
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	○	職員個々にノートを持たせ、専用ノート等にて利用者の様子など記述している。	○			

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(2)日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にしたい支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	○	一人一人の意向を大切にしたい支援を行っている。				事業所では、利用者の思いや意向を大切にしたい支援をしている。また、おやつや飲み物の提供時のほか、身だしなみなどの場面では、職員は利用者が自己決定できるよう支援している。さらに、重度の利用者を含めて、利用者が自己決定や社会参加ができるよう職員間で話し合うなど、利用者にとって楽しい時間がより増えるような取組みを期待したい。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	見てもらったり、問いかけたり、選ぶ楽しみを持ってもらう。			○	
		c	利用者が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかる力に合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	○	利用者が思いや希望を表せるよう、声掛けをし自己決定を促している。				
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にしたい支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	職員間の決まりや都合を優先せず、一人一人のペースに合った支援を行い、食事はゆっくり自分のペースで摂取してもらう。				
		e	利用者の活き活きた言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	「お変わりないですか」等の言葉をかけ、一人一人の言動や表情にて思いを満足してもらえるように気を付けている。			○	
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	本人の表情や発言に耳を傾けるよう注意し、苦痛を取り除く。				
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重したい関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にしたい言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	○	利用者の性格を把握し、言葉遣いや態度等気を付けている。また、大声で話さないよう気を付けている。	○	△	○	事業所では、言葉にも暴力があることなどを学ぶ機会があり、職員間で共有して、利用者に失礼のない態度や声かけができるよう取り組んでいる。耳の遠い利用者にも配慮し、職員が近くで声かけをするなど、さりげないかわりにも努めている。また、居室への入室時には、職員からノックと声かけをして、入室するようにしている。さらに、全ての居室にはのれんを掛けられ、入り口は解放されているものの、職員は利用者から希望があれば、閉める対応もしている。
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉がけや対応を行っている。	○	強制的な誘導はしないように、声を掛けて同意を得て対応している。			○	
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	気遣いの出来る介助を行っている。				
		d	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	入室の際はノックをし声かけを行ってから入室する。退室時は声をかけてから退室する。			○	
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	○	重要項目に目を通し、理解している。				
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	○	お手伝いしてもらったら「ありがとう」の言葉を忘れない。				事業所には重度の利用者が多く、日中にリビングで過ごす利用者は限定されている。今後は、その都度職員から声かけをするなど、重度の利用者も食事やおやつ、その他の時間にも可能な限り居室から出て、リビングで他の利用者等と関われる機会を増やせるような取組みを期待したい。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	お互い声掛けしながら、生活することで安心を得ている。				
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	○	利用者同士が仲良く生活できるように見守る。			△	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	利用者同士のトラブルはないが、気の合わない方もおられるので、キッチンで過ごされる際は、座席等の配慮をしている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係 継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	○	入所時の聞き取りや本人との会話の中でこれまでの人間関係継続の支援を行う。				
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	○	訪ねてこられた近所の方の会話の中で、地域との関係生活状況などを知る。				
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	○	本人・家族が外出等希望されたときは、体調に応じ家族の協力にて外出する。				
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	馴染みの方が来られた時は、居室かキッチンにてゆっくり過ごしてもらう。(現在はコロナウイルス防止対策として面会禁止)				
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	△	天気の良い日や体調の良い日に車いすや歩行などにて近所に散歩に出かけ気分転換を行う。	×	×	△	現在のコロナ禍において、事業所では家族等との面会制限を設けて禁止しているほか、外出も制限されている。天気の良い日には、可能であれば近隣に散歩に出かけることもあるが、重度の利用者も多く、一度にたくさんの利用者を連れていけない現状もある。また、重度の利用者にはベランダやリビングに出て日光浴をしてもらうなど、気分転換も図っている。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	○	地域での催しなど自治会の方に声をかけていただき、参加させてもらっている。				
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	△	ストレッチャーにてキッチンで他の入所者の方と過ごしたり、短時間でも戸外で過ごせるように外出支援に取り組んでいる。			○	
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	○	希望する場所への外出は、家族の方の協力を得て出かけられるよう支援している。				
14	心身機能の維持、 向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	どのような場面で状態変化が起こるのか、職員が気付いたことの意見交換を行い、その状態を取り除けるよう取り組んでいる。				食事の時など、利用者自身ができることは、自分でしてもらい、職員は見守りやできないことの介助をしている。利用者が拒否する場合もあり、職員は根気強く声をかけるなど、可能な限り自身でしてもらうよう努めている。また、事業所には看護師等の資格を持つ職員が多く在籍しており、医学的な観点から利用者の心身機能や能力を正確に把握することができている。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	機能低下の特徴の理解し、残存機能を活用したレク等で維持向上が図れるように努めている。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	○	自分自身で出来た時の達成感が得られる場面を見守っている。	○		○	
15	役割、楽しみごと、 気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	利用者の個々の生活の中で有する力で楽しめるよう支援している。				洗濯物たたみや新聞を折ってごみ箱づくりをしてもらうなど、利用者にできる範囲の役割を担ってもらっている。重度の利用者が多く、役割や出番づくりは難しくなってきたものの、一人でも多くの利用者が楽しみや役割を持てるよう、職員間で継続して検討することを期待したい。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	認知が進んでも、出来ることを一緒に行ったりして喜びのある日常を過ごせるよう支援する。	○	○	○	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	○	地域の行事に参加するように努めている。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみや おしやれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つととらえ、その人らしい身だしなみやおしやれについて把握している。	○	本人の希望の衣服選びや、身だしなみ・おしやれ等本人の個性を大切にする。				整容の汚れや乱れが見られる利用者には、職員がさりげなく声をかけて、フォローをしている。管理者等は、「重度の利用者について、意思決定の部分で課題がある」と感じている。今後は、アセスメントの生活歴や馴染みなどを確認したり、家族から情報を聞いたりするなど、利用者本人の希望を踏まえた活動的な生活が送れるよう支援できることを期待したい。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みに整えられるように支援している。	○	落ち着いた生活が送れるよう愛着のあるものを持ってきてもらう。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員と一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	本人の意思を大切にし、良い結果が得られるよう支援している。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせたその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	○	季節の移ろいを感じとれるよう年中行事の取入れや衣替えを行っている。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にせずさりげなくカバーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	本人を傷つけないように、さりげない対応にてサポートをしている。	○	○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	○	行きつけの店の希望があれば家族の方に連絡し、連れて行ってもらう。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	△	意思疎通が困難であっても表情やしぐさで判断する。その人らしさが保てる支援を行っている。			△	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	その方に合った食事形態により、味覚・視覚を大切にしゆっくり食べてもらう。				以前療養型病棟で使用していた給食室で、専属の職員が調理している。利用者が台拭きや後片づけなど、できることを手伝っているものの、調理などには関わっていないため、調理を担当する職員がフロアに出て、利用者と一緒に下ごしらえをするなど、少しでも利用者が調理に関われる工夫を期待したい。また、利用者から献立のリクエストがあれば、メニューに反映することができている。食器は主に事業所の物を使用しているが、希望があれば自宅等から持ち込んで使用することもできる。事業所には、重度の利用者が多く、利用者の食事介助が終わった後で、別途職員が昼食を摂っている。重度な状態であっても、食事の時間には食堂で他の利用者や職員と関わりが持つことも重要であるため、毎回「食堂と居室のどちらで食事を食べたいか」利用者に確認しながら、食事支援できることを期待したい。さらに、献立のバランスなどの栄養面に関しては、法人の代表者が医師であるため、十分相談しながら対応している。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	○	食事は厨房で準備するため、後片付けができる方は手伝ってもらう。			△	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	行事にておやつ作りをする時は、飾りつけや片付けなどできることを手伝ってもらい達成感につなげている。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	入所時、本人・家族に好き嫌い、アレルギー等聞取りを行い把握している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔ながらの味などを取り入れている。	○	献立の中に季節の食材を取り入れたり、高齢者の方が多いので、昔懐かしい物を出してもらったりしている。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせた調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いりどりや器の工夫等)	○	咀嚼・嚥下困難など変化があるときは、食事形態を変更して経口盛り付けにも工夫してもらう。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	自宅から使い慣れたものを持って来られる方もいる。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	○	利用者と一緒に食事を食べることはないが、一人一人の様子を見守り、その方のペースに合った食事摂取、食べ残し等があってもさりげなくサポートしている。			△	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	食事のメニューを伝え、「美味しそうな匂いがするね」「もうすぐ食事の時間ですよ」と声をかける。	○		△	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べられる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	利用者一人一人の毎日の食事摂取量・水分摂取量を記録し、一日に必要な水分・食事がとれているか確認する。				
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	○	少しでも摂取できるように、食事形態を変更したり水分補給などにて低栄養になったり脱水症状を起こさないよう取り組んでいるが、食事が摂取できないときはあべ医師に報告し指示を仰ぐ。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	体調変化がある場合は、職員同士で話し合いを行い調理方法を変更する。			○	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	手洗い・消毒を徹底し、食材は新鮮なうちに使いきる。調理器具は熱湯をかけ熱殺菌する。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	○	1日3回口腔ケアを行う。				食後には、利用者は口腔ケアをしている。利用者自身で歯磨きなどできることはしてもらい、できないことは職員が介助や確認をしている。また、定期的に歯科医に往診してもらったり、家族に歯科医への受診支援を依頼したりするなど、事業所では利用者の口腔内の状態を把握している。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	口腔ケア時、口腔内異常の早期発見・義歯の不具合があれば本人・家族の希望を確認し歯科受診を行う。			○	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	○	歯科医から口腔ケアについて指導を受けており、正しい方法を学び支援に生かしている。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	清潔保持が出来るように努めている。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。 (歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等)	○	食後のうがい・歯磨き・入れ歯の手入れ等できないことは手伝いながら口腔清潔の支援を行っている。			○	
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医に受診するなどの対応を行っている。	○	家族・本人と相談し、受診を決めている。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	声掛けにてトイレ誘導を行い、排泄自立を促し、気持ちよく過ごせるよう努めている。				職員は、利用者に声かけや誘導を行い、可能な限りトイレで排泄できるよう支援している。事業所では、利用者の排泄状況や水分量などを把握し、丁寧に記録を残すことができている。さらなるステージとして、利用者一人ひとりのトイレ介助の有無や、おむつやリハビリパンツなどの排泄用品の形態の変更について、職員同士が口頭での共有のみに留まらず、話し合った内容を記録に残しておくことを期待したい。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	便秘によって腹部が張り食事が少なくなってきたりするので、体調管理をしっかり行う。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	○	排泄チェック表を使用し、排泄状況を把握している。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	○	個々のパターンを理解し、その時々状態にて転倒の危険がなければ、トイレでの排泄を促す。	○		○	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	高齢となり、自分の足で立つことが困難な場合やトイレが間に合わなかった時などは、状況に応じておむつ・リハビリパンツを利用する。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	声掛けにて、早めのトイレ誘導を行っている。				
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	日中はリハビリパンツ着用にて、トイレに行かれるが、本人希望にて夜間のみおむつをされる方もおられる。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けている。	○	下着着用の方もおられるが、状況に応じてリハビリパンツを使用したりしている。				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	△	ベッドからの離床を促し体を動かすように支援し、繊維質の多い食事や水分摂取にて自然排便を促しているが、どうしても排便困難な時は薬を使用する。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)。	○	週2回入浴としているが、体調が悪かったり入浴を拒否される方は体調の良い日に変更したり、時間変更にて入浴してもらっている。	◎		○	週2回を基本として、利用者は入浴することができる。入浴時間は事業所で設定しているものの、好みのシャンプーを使用したり、入浴の意思の確認や声かけを工夫したりするなどの対応もしている。また、重度の利用者にはシャワーチェアを使用してシャワー浴などの対応をするほか、2人体制での入浴介助もしている。今後は、利用者の希望やこれまでの習慣に応じて、柔軟に対応できるよう職員間で話し合うなど、利用者が入浴を楽しめるような工夫を期待したい。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分に入浴できるよう支援している。	○	石鹸やシャンプーは利用者の好みのものを使用し、希望やタイミングに合わせて入浴してもらっている。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	浴室は個室で介護職員が2人付き、利用者が安全安心に入浴できるよう支援している。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせずに気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	入浴を強制しないで、「入浴しませんか」「気分悪いですか」などの声掛けを行い、気持ちよく入浴ができるよう支援している。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	○	入浴前にバイタルチェックを行い、特に異常がなければ入浴してもらう。入浴後のバイタルチェックも行っている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	利用者一人一人の生活パターンがあるので、その時々状況に応じて安心して気持ちよく眠れるよう支援している。				事業所では、安易な内服薬に頼ると日中まで眠気が残ってしまう利用者もあり、できる限り服薬に頼らない支援に取り組んでいる。日中の活動を増やすなど、職員は利用者が夜間自然な安眠できるよう努めている。また、日中も居室で過ごしている重度の利用者がいるものの、職員は丁寧な声かけをしている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	部屋の明るさ・寝具・寝衣の調節を行い、気分・体調に合わせて入眠できるように配慮している。				
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	昼夜逆転があるので、日中は職員が話しかけたり、ベッドから離床を勧めたりして体を動かし、夜は自然入眠できるよう支援している。			○	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	○	利用者が居室にてゆっくり過ごす時間を大切にしている。				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	○	本人自身が直接電話(携帯)をされたり、希望に応じ連絡を取ったり、外部との交流を支援している。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	利用者より代筆を希望されたときはお手伝いしている。				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	居室で気兼ねなく話ができるよう配慮している。				
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	手紙・葉書等読める方には本人に渡しているが、家族に郵便が届いていること連絡し、対応は家族にお願いしている。				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	利用者の希望があれば家族への電話をしたり、電話がかかった際は、本人と話をしてもらっている。				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	本人がお金を所持することで安心されることを職員は理解している。				
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	○	訪問販売の方に寄ってもらい買い物をする楽しみを持ってもらう。				
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	○	スーパーなどへの買い物に出かけることは無理であるが、訪問販売を利用している。(火曜日・木曜日 あすも)				
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	○	大金ではないが、お小遣い程度のお金を持つことでの安心感を得てもらう。				
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	入所時お金の所持方法など、本人・家族と話し合っている。				
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしておき、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	家族より預かったお金は、預かり金として管理し、必要時使用させてもらい、預かり金額・使用した金額など出納帳に記載している。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	本人や家族のその時々の変化・状態に対して支援やサービスを行えるように取り組んでいる。	○		○	利用者等の希望に応じて、家族や介護タクシーに協力してもらいながら、馴染みの理容院に出かけたり、訪問マッサージなどの外部サービスを利用することができていた。現在のコロナ禍において、外出や面会の制限が設けられており、利用者の要望には対応できないこともある。

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(3)生活環境づくり									
25	気軽に入れる 玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	玄関にウェルカムボードを設置し、催し等の記載を行い家族の方や近所の方が気軽に訪問できるように工夫している。 (現在コロナウイルス防止対策として入所禁止)	◎	◎	○	事業所の玄関は、母体医療機関の裏側にあるものの、医院と1階ユニットはつながっている。玄関の正面には、大きな手書きのウェルカムボードを設置され、分かりやすく気軽に入りやすい環境となっている。
26	居心地の良い 共用空間づくり	a	共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、家庭的な雰囲気有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。（天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものしか置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそごような設えになっていないか等。）	○	季節の変化が感じられる花を飾ったり、入所の方と飾り物を作って貼ったりして、住まいとしての心地よさを感じてもらおう。	○	×	○	事業所は、以前療養型病棟として使用していた建物を改修して使用している。共有空間や居室には、病室の名残はあるものの、利用者や職員の作った物を壁などに飾り、居心地の良い共用空間となっている。また、事業所の建物の眼下の川沿いには、春になると満開の桜を見ることができる。さらに、訪問調査日には、季節の花の飾りを用意したり、1Fから2Fに利用者が遊びに来て、リビングで交流したりする姿を見ることができた。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	○	大きな音を出さないよう配慮し、明るさを調整したり掃除もこまめに行っている。				
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激（生活感や季節感を感じるもの）を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	花を飾ったり、カレンダーなど季節の移り変わりを知ってもらい、心地よく過ごせるよう心掛けている。				
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	居室に閉じこもらないようキッチンでお話をしてもらったり、静かに過ごしたい気分時はその居場所を工夫している。				
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないう工夫している。	○	浴室は個室であり、戸を閉めて一人一人入浴をもらっている。介助用トイレは直接見えないようにしている。				
27	居心地良く過ごせる 居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好み のものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	居室は自宅からお気に入りの物や仏壇などを持って来られ過ごしやすいように工夫している。	○		○	居室には、ベッドやタンスが備え付けられている。仏壇や棚などは、利用者が使い慣れた物や馴染みの物を持ち込むことができ、利用者に応じた部屋となっている。また、以前の病室を居室として使用しており、徐々に家庭的な空間になってきている。
28	一人ひとりの力が 活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	バリアフリーであり、安全のため手摺設置、浴室・トイレ・各居室にもフザーがあり、いつでも対応できるように配慮している。			○	事業所内には、トイレや非常口の方向を分かりやすいように表示し、利用者自身の力で移動する際の目印となっている。
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	○	居室の前には目印となるものを飾ったり、物品移動する場合は利用者への説明を行う。				
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。（ぼうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等）	○	利用者が集まるキッチンには、新聞・ぬりえ・クレヨン・色鉛筆・折紙など自由に使用できるよう置いており、自由に過ごされている。				
29	鍵をかけない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット（棟）の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。（鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等）	○	居室やユニットの出入り口に鍵をかけない生活にて、徘徊の恐れのある方への見守りを職員全員で行っている。	○	○	○	日中は、事業所の2階玄関と診療所側の玄関の鍵は空いているものの、現在のコロナ禍で面会や外出の制限を設けていることもあり、1階玄関は施錠をしている。また、職員は鍵をかけることの弊害を理解していることもあり、コロナ禍の終息後等には玄関を解放するなど、職員間で検討することを期待したい。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	○	利用者の安全を確保しつつ、抑圧感のない自由な暮らしを支援し、心豊かな暮らしができるよう支援している。				
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している（外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等）。	○	施錠も拘束であることを理解し、徘徊のある方が出入口付近におられる時は職員が声をかけるようにしている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	入所時のアセスメントを職員間で共有し、個々の病歴・現病・留意事項について把握している。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	毎日のバイタルチェックにて異常の早期発見に努めている。異常がある時は状態をノートに記載し職員間で共有し一般状態の病状変化など把握している。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	○	利用者の体調異常など気になるときは、協力医あべ先生に報告・診察をしてもらっている。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	○	受診は本人及び家族の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医の受診ができるよう支援している。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	○	主治医の継続的な医療を受け、異常の早期発見が出来るよう支援している。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	○	通院方法・受信結果・報告に関する情報など、共有できるノートに記録し、次回の診察がスムーズに行えるように介護タクシーの予約など本人・家族と話し合いを行っている。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	○	家族などと相談しながら、安心して治療できるように医療機関に対して本人の情報提供を行っている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	○	情報の提供交換を行い、早期退院に繋げる。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	○	家族などと相談しながら、医療機関に対して本人に関する情報の提供などを行い、スムーズに入院できるよう支援している。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	○	介護職員は、利用者の異常に気付いたときは、看護師に相談して早めに対応が出来るように心掛けている。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	○	医師が事業所の3Fに居住しているので、24時間体制で緊急時にも対応できる。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	○	異常があれば看護師に報告し対応できるようにしている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	○	職員全てが用法・用量は理解しており、間違いないように服薬支援を行っている。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	○	薬の変更があれば、送りノートに記載し薬の間違いはないか数回チェックを行い、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	服薬介助を行い薬による体調変化はないか、スムーズに飲めるかなど常に服薬介助を行っている。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	内服後、状態の変化など見られたら早めに医師・看護職員に状況報告を行い記録を残す。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	○	状態変化の段階ごとに、本人・家族との話し合いを行い、要望意向や方針など共有するようにしている。				事業所では、現在看取り加算の算定はしていないため、看取り指針は作成していない。以前の療養型病床で勤務していた職員が事業所には多く在籍しており、事業所には母体医療機関も併設され、24時間体制で専門的医療の提供が受けられる仕組みが整っている。また、緊急時には連携も迅速に取れ、利用者や家族、職員には安心感がある。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけでなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	○	医師・職員・本人・家族と早い段階から話し合いを行い、方針を共有する。	○		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々の職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	職員の思いや力量を理解し、どこまでの支援ができるか支援方法を考えるようにしている。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	主治医・職員・本人・家族に事業所でできることとできないことの対応方針についての十分な説明を行い、主治医と連携を取りながら対応できるようにしている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	○	24時間体制で医師・看護職員が介護職員と共に支援しており、利用者・家族が安心して過ごせるよう支援している。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	○	本人や家族の気持ちに寄り添いながら支援対応している。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	感染対策マニュアルにて、予防策・対応策など職員で勉強会を行っている。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	感染症マニュアルにて、感染が発生した場合の手順に沿った対応ができるように、日頃より職員全員が手順に沿った対応方針を共有している。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	○	保健所・行政・医療機関などを通じて感染症に対する予防対策、地域の感染発生状況の情報を入手し予防対策を取り入れている。				
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	○	感染症流行時期は早めの対応対策を行い発生状況の収集を行う。				
		e	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	○	来訪者の方にも感染症対策としての手指消毒、清潔の保持などの説明を行い協力してもらう。職員全員手洗いうがい・マスクの着用など徹底して行っている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅱ.家族との支え合い									
37	本人とともに支え合う 家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	共に生活をしていると思ってもらえるように一緒に本人を支えていけるように職員が一人一人支えていけるように支援している。				現在のコロナ禍において、事業所では面会や外出の制限が設けられているため、家族との食事会を兼ねた親睦会や行事参加、面会は自粛している。連絡事項があれば、必要に応じて家族に電話したり、家族が母体医院の受診時に利用者の様子を伝えたりしている。また、面会等が自粛されているため、利用者の様子を撮った写真などを家族に送付して、利用者の近況を伝えている。また、利用者家族等のアンケート結果から、事業所の運営上の事柄などが伝わっていないことが窺えるため、請求書の送付時に事務連絡を沿えて送付たり、SNSを活用して連絡したりするなど、多くの家族から理解が得られるとともに、家族の意見を取り入れながら事業所が生活の場としての雰囲気づくりができることを期待したい。
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	面会の方が来られた時などは、ゆっくり会話ができるように支援している。				
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等)	○	行事に参加してもらったり、戸外外出など家族の方に協力をお願いしている。	×		○	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	誕生会での写真を部屋に貼ったり、日常生活の状況などを伝えたり電話で話せる方は連絡を取り話をしてもらっている。	○		○	
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して報告を行っている。	○	個別ノートを作成し、日頃の生活状況を記録し見てもらい、家族からの要望や気付いたことなどを書いてもらい家族との関係づくりを支援している。				
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	生活の変化や会話の中での変化など、家族に理解してもらえるように状況を話してよい信頼関係が保てるように、日中穏やかに生活できるように支援している。				
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	○	推進会議で事業所の出来事などを報告し、協力を得るようにしている。	×		△	
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。(家族会、行事、旅行等への働きかけ)	○	年間行事の参加や、年1回家族との親睦会を開催して交流が持てるようにしている。				
		i	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	高齢であり、認知症もあるため何があるかわからない状況であるが、穏やかな暮らしが継続できるよう支援している。				
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	○	入所時具体的に説明を行い、理解・納得を得ている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	退居については、契約時説明を行っており、希望先へのスムーズな移動ができるよう支援している。				
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。(食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	○	重要事項説明書に示し、入所時説明会を行い同意を得てサイン・押印をいただき家族に1部渡している。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅲ. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	事業所での会議に自治会代表の方に参加していただき、事業所の役割や目的を説明して理解してもらっている。	/	◎	/	現在のコロナ禍において、事業所では面会や外出の制限を設けているため、以前のような地域とのつながりや交流は見合わせている。コロナ禍以前には、保育園のハロウィンに参加したり、秋祭りの神輿に來訪してもらったり、地域行事に参加するなど、地域との交流やかかわりを持つ機会はあったが、現在は減少している。また、地域関係のお知らせなどは、回覧板で確認している。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。（日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等）	○	自治会の集会に参加させてもらったり、行事などに参加させてもらったり、近所の散歩時には話をしたりして地域との繋がりを持つようにしている。	/	△	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	○	散歩時声をかけていただいたり、できることがあれば協力していただける言葉をいただいたりしている。	/	/	/	
		d	地域の人気が気軽に立ち寄ったり遊びに來たりしている。	○	「近くきたから顔を見に來たよ」と言って寄っていただいたりしている。	/	/	/	
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	○	入所の方に声をかけていただいたり、日常的な付き合いができています。	/	/	/	
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。（日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援）	○	近所の住民の方が行事などがある時声をかけてくださり、一緒に参加させてもらい生活の広がりの支援を行っている。	/	/	/	
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	○	防災訓練など本人が心身の力を発揮しながら、安全な暮らしができるよう支援している。	/	/	/	
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている（公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等）。	○	消防訓練に立ち会っていただいたり、理美容店の方に散髪に来ていただいたりしている。移動販売にも来ていただいて利用者が自分で好きなものを買ったりできるようにしている。	/	/	/	
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	○	運営推進会議には、自治会の方や家族の方にも声をかけ参加してもらっている。	×	/	△	運営推進会議には、町内会長や民生委員、施設職員、警備会社、家族、市担当者等の参加を得て開催している。毎回家族の参加を呼びかけているものの、家族の参加は少なくなっている。会議では利用者の状況や日頃の事業所の取組みなどを報告している。会議の中で出された意見を職員間で検討したり、要望などの対応結果などを次の会議で報告したり、議事録に出された要望を記録に残すなど、参加者に理解を得ながら工夫された会議となることを期待したい。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実績、評価への取り組み状況（自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等）について報告している。	○	評価への取り組み状況、サービスの実績など参加者に報告している。	/	/	○	
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	○	会議での意見や提案を日々サービス向上に活かし、後日状況の報告を行っている。	/	×	○	
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	○	参加メンバーの変化はあまりないが、できるだけ多くの方の出席があるように、時間帯などの配慮を行っている。	/	○	/	
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	○	議事録各ユニットに提示している。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	事業所の理念について共通認識を持ち、尊厳ある自立した日常生活ができるよう、また理念に基づいたものとなるように職員全員が認識し実践している。				
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	入所時、事業所の理念を本人・家族の方に伝え、玄関に表示している。	×	×		
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	事業所内での研修を行ったり、外部での研修にもできる限り参加している。				代表者や管理者に対して、職員は何でも言い合える関係性を構築することができている。定期的に内部研修を実施して、職員のスキルアップにも努めていたが、現在のコロナ禍において、開催を中止している。また、法人・事業所として、職員の意見を取り入れながら、働きやすい職場環境づくりに努めている。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	△	事業所内での勉強会・研修を行っている。				
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	職員の意見や要望等があった場合は管理者が取りまとめ、代表者に伝えるようにしており、働きやすい職場環境になるように努めている。				
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	研修参加等の活動を通して、職員の意識を向上させていく取り組みをしている。				
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	体調不良やストレスが見受けられるときは、さりげなく話をしたりゆっくり休養ができるよう取り組んでいる。	○	○	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	○	虐待防止マニュアルを共有し、虐待につながる行為について理解し入所の方への不適切な言葉遣いや態度をとらないように気を付けている。				事業所では虐待防止マニュアルを作成しているほか、月1回実施するミーティング等を活用して、言葉づかいの注意喚起や気づいたことなど、職員間で話し合いをしている。不適切なケアが見られた場合にも、職員間で正しいケアや改善策などの話し合いをしている。また、一方で、虐待は職員によるものだけでなく、面会時等の様々な場面で虐待につながる行為も考えられるため、定期的に虐待防止法の勉強会を実施するなど、日頃のケアを見直す機会を設けることを期待したい。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	月一回開催のミーティングで、気づいたことや改善策など話し合い、日々のケアにつなげている。必要に応じて、その時々で話し合うこともある。				
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見過ごされることがないよう注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	○	全職員は虐待は不適切な行為を発見したり、他の職員から聞いた時は速やかに話し合い、正しいケアが行われるように取り組んでいる。			△	
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	態度・言動・言葉のトーンで利用者へのケアや他の職員に対して不快な思いをさせていないか日常的に注意を払っている。				
44	身体拘束をしない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	○	身体拘束をしないケアとは何かを身体拘束マニュアルにて理解し、やむを得ない場合の身体拘束を行う際は家族・本人に理由を話し拘束時間などの説明を行い、承諾書にサイン・押印を頂くようにしている。				
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	○	ミーティングやその時々で具体的な禁止行為の理解について話し合い、職員全員で共有し取り組んでいる。				
		c	家族等から拘束や施設への要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	△	利用者の安全確保、自由な暮らしの支援を行うため、施設・拘束はできる限りしないようにしているが、状況によってやむを得ない場合の拘束が必要な際は、家族に説明をし理解を得たうえで用紙にサイン・押印を頂いている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する 制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解している。	△	制度の違いや利点などについて理解に努めている。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	△	相談があれば支援を行う。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	△	支援が必要な利用者が、制度を利用できるように地域包括支援センター等の連携体制を築いている。				
46	急変や事故発生時の 備え・事故防止の 取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	○	事故発生時や急変に備えての対応マニュアルにて周知している。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	医師の支持のもと対応している。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	ヒヤリハットにまとめ、事故の発生する時間帯や事故の種類など担当者がグラフ化し職員間で事故防止の取り組みを行っている。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	危険物の排除、誤飲防止として手の届く場所に物を置かない、滑らない履物を履く等事故防止に努めている。				
47	苦情への迅速な対応と 改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	苦情マニュアル作成あり。苦情箱を各ユニットへ設置し、苦情等あった場合は速やかに対応できるように職員間で話し合っている。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	現在までに利用者や家族・地域からの苦情はない。必要な場合は、市町にも相談・報告を行います。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	苦情が発生した場合は、要員・原因を見つけ速やかに回答するように心がけている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等)	○	声掛けを行い、会話の中で思っていることや、してほしいことなど気付けるようにしている。			○	職員は利用者から、日常生活の中やサービスの実施時に意見を聞いている。家族には、面会時や電話連絡時を活用して、職員は意見や要望を聞くよう努めている。また、管理者は職員との関係性が良好で、積極的に職員から運営に関する意見が出される環境もできている。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	家族の意見・要望などの相談窓口(意見箱)の措置。面会に来られた時、個別に話を聞いたり個別ノートに意見や希望等書いてもらっている。	○		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	事業所内各ユニットに、意見・要望箱を設置していることは伝えているが、【市町村の窓口】【公的団体の窓口】などあることを重要事項説明書にも記載している。				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	職員の意見・要望等管理者が取りまとめ、代表者に持っていく相談している。				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	ミーティングにて意見・提案を発表してもらい、より良い支援ができるよう検討している。			○	

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	△	年1回自己評価を行っている。				外部評価の評価結果や目標達成計画は、運営推進会議の中で報告し、参加者から意見をもらっている。今後は、運営推進会議の議事録を詳しく記録して、欠席者にも周知することで次回の会議の議題に取り入れたり、参加メンバーに取組み状況のモニターをしてもらったりするなど、事業所として少しずつステップアップしていくことを意識しながら、周知などの取組みを強化することを期待したい。
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	△	サービス評価を通しての課題について話し合いを行い、目標達成を心掛けている。				
		c	評価（自己・外部・家族・地域）の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	事業所が利用者に対し目標達成計画を作成し、達成に向けて可能な限り対応を行う取り組みを行っている。				
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	○	運営推進会議にて報告。今後の取り組み方についてメンバーの方々にアドバイスをいただき話し合っている。	×	×	△	
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	○	事業所内運営推進会議にて、目標達成計画の取り組みの成果を報告している。				
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。（火災、地震、津波、風水害、原子力災害等）	○	災害発生対応マニュアル作成あり。全職員が災害発生時にどのような対応をすればよいかを確認し把握している。				事業所は医療機関と合同で、年2回避難訓練を実施している。現在のコロナ禍において、地域住民や消防団との合同訓練への呼びかけは自粛している。また、事業所を含む建物は河川の近くにあるため、水害など様々な災害を想定した訓練を実施し、より多くの協力体制が築けることを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	地域・自治会の皆さんと一緒に避難訓練を行う。				
		d	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	保管物品の点検は担当者が定期的に行っている。				
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	○	地域住民、近隣の消防団の方と話し合う機会をつくり、災害時の対応など支援体制を確保している。	×	×	○	
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。（県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等）	○	災害に対する訓練参加。消防訓練を行なっている。				
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。（広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等）	△	自治会の集会に参加させてもらい、事業所での活動の報告をし、協力等お願いしている。				事業所の母体が医療機関であるため、事業所として相談体制を整えているものの、どうしても病院への相談が多くなっている。今後は、市行政や地域包括支援センターのイベントや研修に参加協力したり、地域にある他のグループホーム等の関係機関とも連携を密にしたりするなど、地域ケアの拠点として機能していくことを期待したい。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	相談があれば対応していきたい。		×	△	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。（サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等）	○	事業所内でのイベントなどに参加していただき、地域の方との交流を行っている。				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	○	体験学習希望の受け入れを行っている。				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。（地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等）	△	地域イベントやボランティア活動等できることへの参加をしたり、地域連携室などの機関との連絡を行っている。			○	